(財)米子市教育文化事業団
文化財発掘調査報告書 59

鳥取県米子市

目久美遺跡

（第14次調査）

2008．3

財団法人　米子市教育文化事業団

序

目久美遺跡は全国的にも知られている米子市を代表する遺跡の一つです。一般県道車尾大谷町線の道路建設事業に伴い、当事業団では平成８年より目久美遺跡周辺の調査を数度おこなってまいりました。調査のたびに目久美遺跡の広がりを確認するとともに、新たな発見もあり、目久美遺跡の奥深さを痛感しています。

車尾大谷町線の道路建設事業は今後も継続予定であり、遺跡の更なる展開を期待しています。

さて今回、鳥取県から委託を受けて実施した「目久美遺跡（14次調査）」の発掘調査報告書を刊行することになりました。調査は、大変狭い範囲ではありましたが、縄文時代の遺物を中心に比較的多くの遺物が発見されました。この報告書が、今後さまざまな分野で広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、今回の調査に当たって多くの方々にお世話になりました。指導、ご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

平成20年（2008年）３月

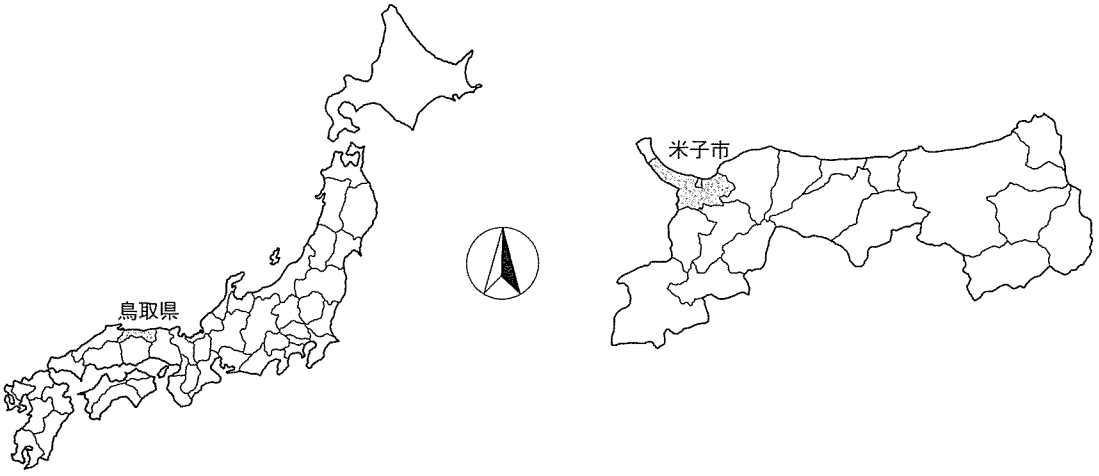
財団法人　米子市教育文化事業団
理事長　小　林　道　正

例　　言

1　本書は鳥取県西部総合事務所の依頼を受けて、財団法人米子市教育文化事業団が平成19年度に実施した、３・４・20車尾大谷町線地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　本書の図中の方位は磁北で、表記した座標値は国土座標第Ⅴ系の座標地である。またレベルは海抜標高を示す。
3　本書に記載した第２図の地形図は平成４年11月１日、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「母里」、平成９年３月１日、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「伯耆溝口」、第４図の地形図は平成17年１月１日、国土地理院発行の５万分の１地形図「米子」を加筆して使用した。
4　本書に記載した第３図の地形図は昭和63年10月修正米子境港都市計画地図（米子市）を複写して掲載している。
5　発掘調査によって出土した遺物は、米子市教育委員会が保管している。
6　本書の執筆及び編集は（財）米子市教育文化事業団が行った。

凡　　例

1　遺物実測のうち、須恵器は断面を黒塗り、その他の遺物は断面を白抜きで示した。
2　遺跡の略称は、目久美遺跡をME―14とした。
3　遺物実測図の縮尺は土器1/4、石器1/3・1/1で掲載している。
4　本文、挿図及び写真図版中の番号は一致する。
3　石器の重量測定には、新光電子社製DJ－3000を使用した。



第１図　米子市位置図

目　　次

序
例言
凡例
目次
第１章　調査の経緯 ……1
　第１節　調査に至る経緯 ……1
　第２節　調査の体制 ……1
第２章　位置と環境 ……2
　第１節　位置 ……2
　第２節　遺跡の概要 ……3
第３章　目久美遺跡の調査……4
　第１節　調査の経過と方法 ……4
　第２節　調査区内の堆積 ……4
　第３節　遺構について ……7
　第４節　遺物について ……7
第４章　まとめ ……14

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県が進める３・４・20号車尾大谷町線地方道路交付金事業に伴い、文化財の保護を目的とした調査である。

平成19年に鳥取県から米子市教育委員会に照会があり、目久美遺跡は周知の遺跡であることから相方協議の結果、調査を実施することになり、（財）米子市教育文化事業団が依頼を受けた。

現地調査は平成19年８月６日から平成19年８月10日まで行い、調査の結果、遺構としては、石列、足跡を確認し、遺物は縄文土器・弥生土器・石器等がコンテナ約２箱出土した。

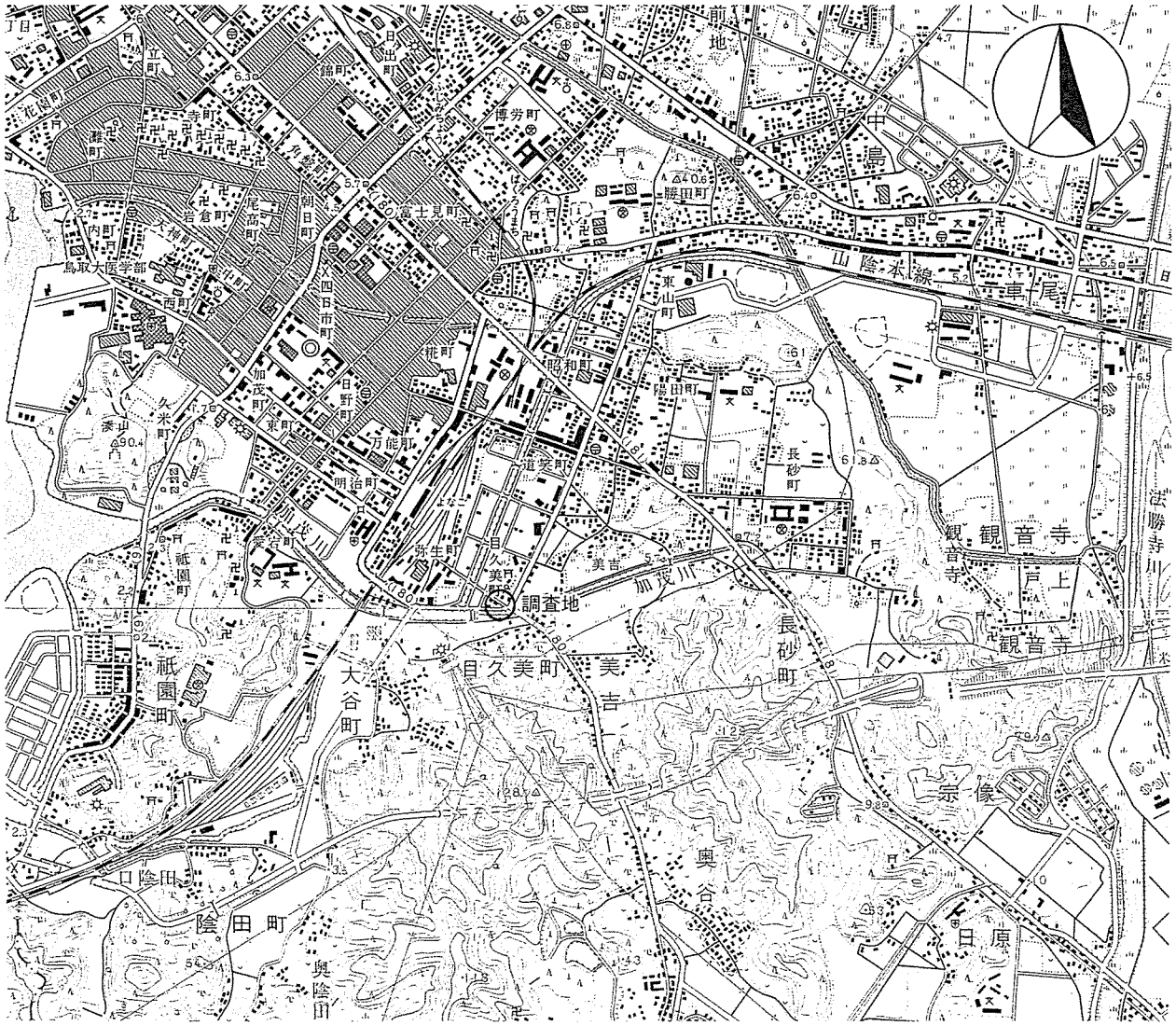
第２節　調査の体制

調査主体　財団法人米子市教育文化事業団
　　理 事 長　小林　道正

　　埋蔵文化財調査室
　　室　　長　長谷川　明洋（米子市教育委員会　文化課長）

調査担当　　主　　任　平木　裕子
調査指導　　米子市教育委員会

作業員
太田康子　陶山富子　渡部安子（敬称略）



第２図　目久美遺跡位置図（Ｓ＝１：25,000）

第２章　位置と環境

第１節　位置

今回調査を行った目久美遺跡（14次調査）は、JR米子駅の南東0.5㎞に位置し、目久美遺跡の一角にあたる。

米子市は鳥取県の最西端に位置し、古くから「山陰の商都」と称されるように商業で栄えた鳥取県西部の中核都市である。平成17年（2005年）に東部に隣接する淀江町との合併により総面積132.21㎡、人口約15万人となった。

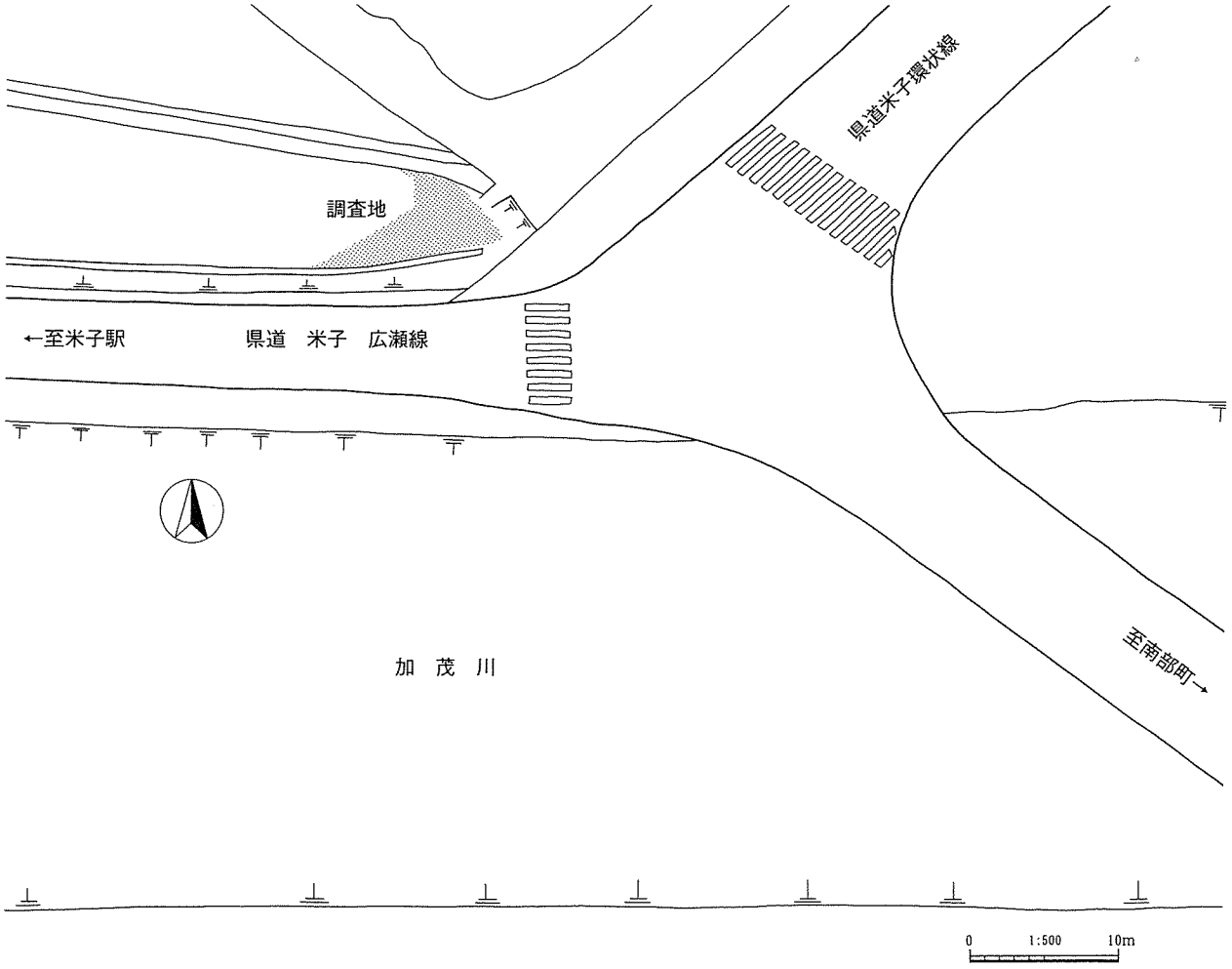
地形的には、米子市は日野川の沖積作用によって形成された山陰では比較的広い平野である米子平野が広がり、周辺部を東側に大山（標高1,701ｍ）とその造山活動によって形成された火山灰台地、南側から西側には中国山地から続くなだらかな丘陵によって囲まれる。北側には日野川の流出土砂の堆積によって形成された弓ヶ浜半島が島根半島へと延び、これらの半島に囲まれた汽水湖中海に面する。

目久美遺跡は、ＪＲ米子駅の南東0.5㎞周辺に位置し、南側に位置する行者山（標高128ｍ）から伸びる丘陵裾部一帯に展開していると考えられる。調査地の北側には、足尾山と呼ばれる目久美神社が置かれる独立丘陵がある。

第３図　目久美遺跡調査位置図（Ｓ＝１：2,500）

第２節　遺跡の概要

目久美遺跡は、米子平野の南端に立地する低湿地遺跡で、昭和８年（1933年）に行われた新加茂川の開削工事中に発見された。昭和９年（1934年）には梅原末治、昭和28年（1953年）には佐々木謙らによって現在の県道米子広瀬線部分が調査され、縄文遺跡と弥生遺跡が層位的に検出されたことで注目された。その後、昭和57年（1982年）には加茂川改良工事により大規模な調査が実施され、山陰地方では初めて弥生時代の水田跡が検出された。昭和59年（1984年）には同じくによる池ノ内遺跡の調査が行われている。昭和63年以降下水道工事に伴う調査で、小規模ながら２次、３次、４次、７次調査が行われ、水田遺構及び弥生前期の土器を多く含む遺物包含層などが確認されている。平成８年（1996年）からは、一般県道車尾目久美町線の道路工事に伴って、５次、６次、８次、９次、10次、12次、13次調査が行われた。いずれの調査においても水田･足跡･水路等が確認されている。特に平成９年に実施された６次調査では、遺跡を縦断する大規模な弥生時代の水路跡の存在が明らかとなり、当時の土木技術の水準を知る貴重な手がかりが与えられている。本報告の14次調査及び、今年度発掘調査を行った15次調査、大谷遺跡もこの道路工事を原因とするものである。



第４図　目久美遺跡（14次調査）調査位置図（Ｓ＝１：500）

第３章　目久美遺跡の調査

第１節　調査の経過と方法

現地調査は、平成19年（2007年）８月６日から開始し、平成19年（2007年）８月10日まで行った。調査面積は、35㎡で、現地表面から約2.0ｍの深さまで掘り下げた。調査地は昭和57年（1982年）から調査が行われた第1次調査地の北側に当たる。地表面から２ｍ掘り下げたところで、調査地の西側で玉砂利層を検出し一見地山かと思われたが、第１次調査においてこの層から縄文時代の遺物が出土していることから、掘り下げたところ同じく縄文時代の遺物が出土した。第１次調査ではこの層の下は地山であったが、礫層の下を一部分掘り下げてみたが、腐植物を含んだ粘土層であった。遺物等の出土もなく、周辺の調査の結果から、この層より下では遺跡はないと判断した。第１次調査とは約20ｍの距離であるが、若干の堆積の違いがみられた。

調査の結果、遺構としては石列、足跡を検出し、遺物は縄文土器、弥生土器、須恵器、石製品等が出土した。

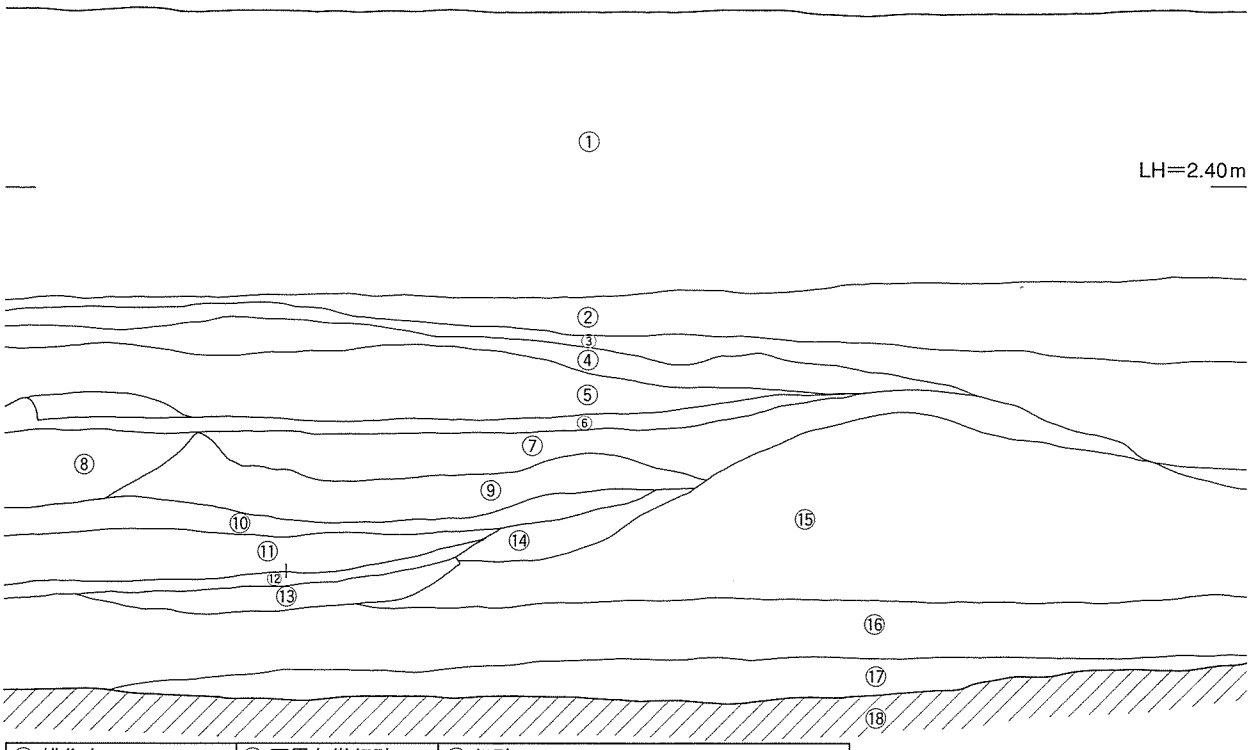
第２節　調査区内の堆積（第５図）

調査地の地形は、行者山から派生する小丘陵の裾野にあたることから、調査地の南東側から北西側に向けて緩やかに傾斜する。土層観察は調査地の北東側壁面で行った。

調査区の堆積は、耕作土の下は洪水の堆積層である粘土とシルトの交互層で、その下に弥生時代の水田層と思われる灰色粘土層が堆積する。この粘土層の下には礫層が堆積する。

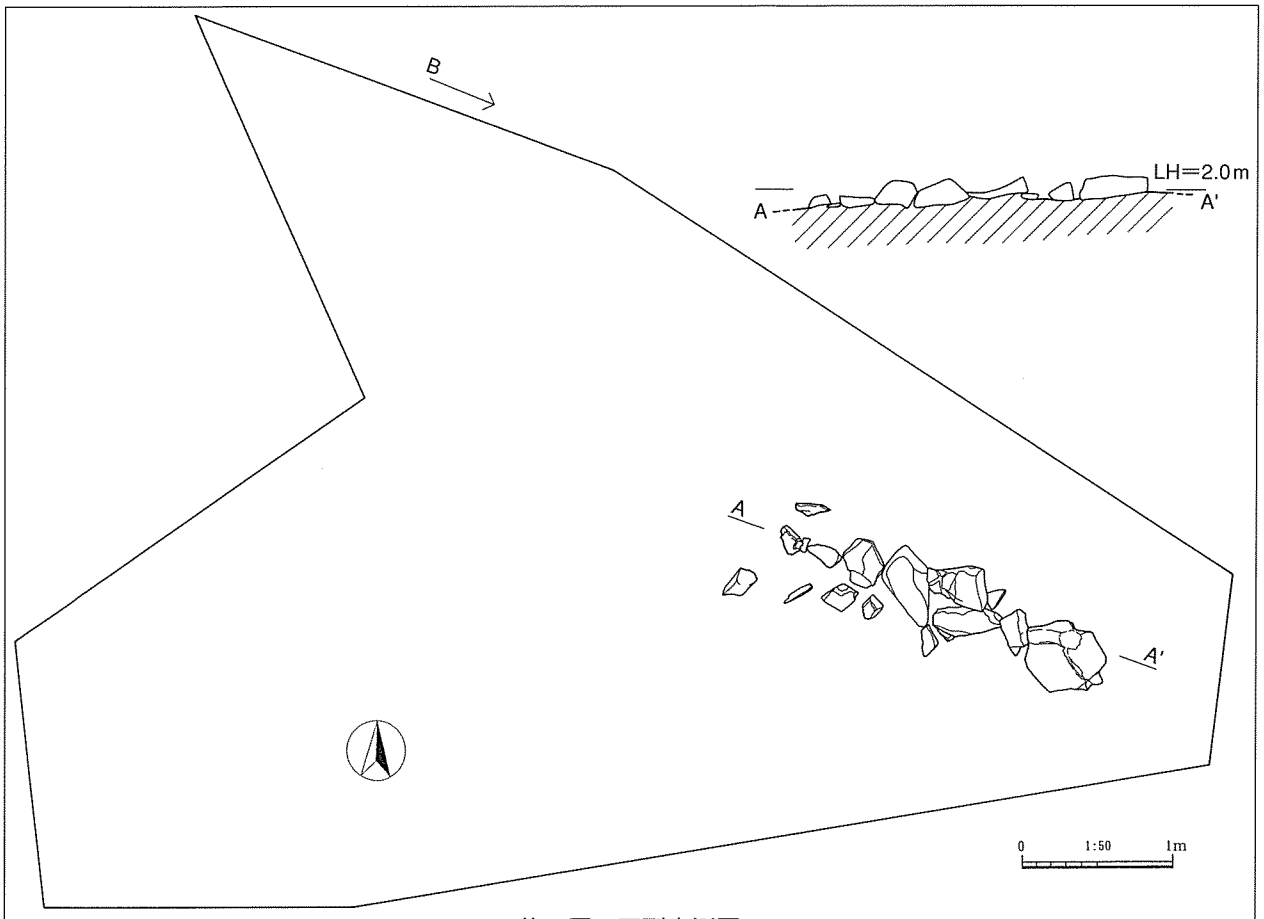
第　1　層　耕作土
第　2　層　青灰色粘土（小礫含）
第　3　層　暗灰色粘土
第　4　層　シルト
第　5　層　シルト・細砂交互層
第　6　層　暗黒灰色粘土
第　7　層　灰黒色微細砂
第　8　層　細砂
第　9　層　微細砂
第　10　層　灰色シルト
第　11　層　砂層（灰色粘土混）
第　12　層　灰色粘土
第　13　層　細砂
第　14　層　黒色粘土
第　15　層　小礫層（砂混）
第　16　層　中礫層（径５cm程度）
第　17　層　灰白色粘土混じり小礫層
第　18　層　濃茶色粘土（腐植物混）

第１層は現在の耕作土、第２層は旧耕作土と思われる。第３層の暗灰色粘土は恐らく水田層と思われるが、時期については不明である。第４層・第５層は洪水による堆積層、第６層暗灰色粘土は、第１次調査の第５層に対応する弥生時代の層と思われる。第７層から第13層は、洪水によって堆積した砂層と思われる。第14層は洪水によって流された腐植物が第15層の高まりによって澱み堆積してできたそうであろう。第15層から第17層は礫層で、当初ここが、地山にあたるのではと思われたが、第1次調査の第９・４層·第９・５層に対応する層ではないかと掘り下げたところ、第１次調査と同様遺物が多量に出土した。第15層の上面は、南側は比較的フラットであったが、北側で約50cm程度落ち込んでいる。第18層は濃茶色粘土で腐植物等が混じった層で第11-２層黒茶褐色粘質土（マコモ含む）に対応すると思われる。（土層観察は調査地の北東壁面で行った。第６図Bライン）

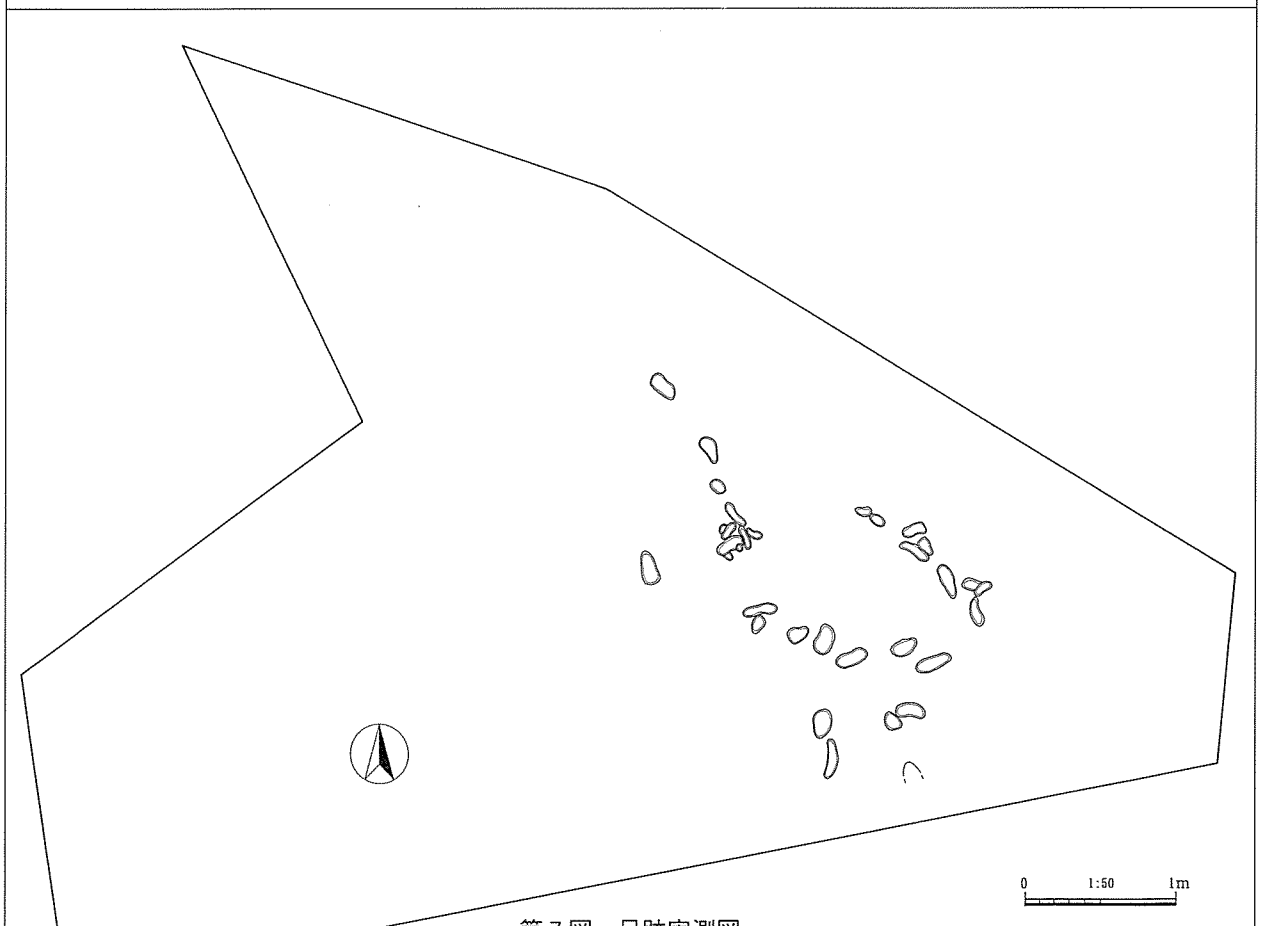


① 耕作土	⑦ 灰黒色微細砂	⑬ 細砂
② 青灰色粘土（小礫）	⑧ 細砂	⑭ 黒色粘土
③ 暗灰色粘土	⑨ 微細砂	⑮ 小礫層（砂混）
④ シルト	⑩ 灰色シルト	⑯ 中礫層（径５cm程度）
⑤ シルト・細砂交互層	⑪ 砂層（灰色粘土）	⑰ 灰白色粘土交じ（６層と10層の混合層）
⑥ 暗灰色粘土	⑫ 灰色粘土	⑱ 濃茶色粘土（腐植物混）

第５図　目久美遺跡土層断面図



第６図　石列実測図



第７図　足跡実測図

第３節　遺構について

調査区の北側で石列と足跡を検出した。

石列（第６図）　標高2.0ｍの第３層暗灰色粘土面で40～50㎝台の角礫が数個、一直線上に並ぶ石列を検出した。当初流れ込みと思われたが、ほぼ一直線上に並んでいること、礫の間から杭が検出していることから、何か意図的なものであると考えられる。しかしながら、範囲が狭く地形的変化を確認することが出来ず、この石列の性格は不明である。

足跡（第７図）　標高1.8ｍの第６層暗灰色粘土面で安定した暗黒灰色粘土層を確認し、この面で足跡を検出した。足跡は比較的調査区の北側隅で検出された。畦畔等の確認は出来なかったが、第1次調査の層位と対応するならばこの面が弥生時代の水田面の可能性が考えられる。

第４節　遺物について

遺物はコンテナ２箱が洪水堆積層及び小礫層中から集中して出土した。

縄文時代の遺物（第８・９図）

今回の調査で出土した縄文土器はほとんどが小片で、図化できたものでも全体像がわかるものは少ないが、No.１～No.17は深鉢、No.18～26は浅鉢と思われる縄文時代前期の土器である。

鉢形土器　No.1・27は隆帯を施したもので、うちNo.1は条痕地に棒状刺突文及び隆帯には刻み目を施す。

No.２・５・７・８・９・13・18は、爪形文を施文する土器である。このうちNo.８はＤ字状、その他は平行線内に刺突されたＣ字状の連続爪状である。またNo.２・５は爪状文様帯の下方にそれぞれ斜縄文・羽状縄文を施し、口縁端部に刻み目を施す。

No.３・４は、貝殻腹部による平行連続刺突されている。

No.16・17は条痕地に斜縄文を施したものである。

No.19は、棒状の刺突具により連続刺突された平行文様帯を構成する。

No.６・10・11・12・14・15・20・22・23・24・25・26は条痕のみである。このうちNo.11・25・26は口縁端部に刻み目を施す。

No.21は無紋の浅鉢で、口縁端部に刻みを施す。

No.28・29は小型の鉢で棒状刺突文を施し、No.29は口縁端部に刻み目を施す。

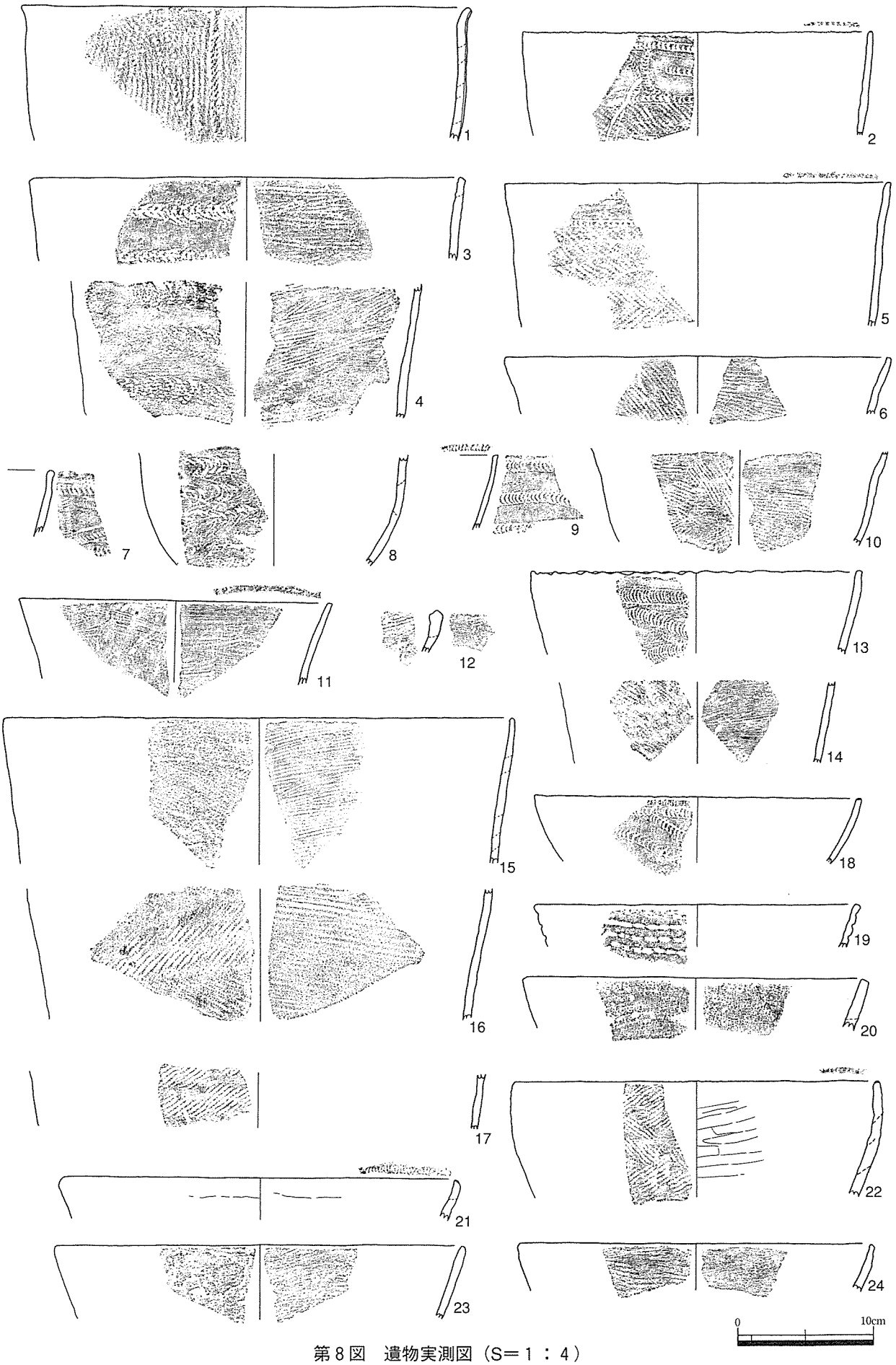
弥生時代の遺物（第９図）

今回出土した弥生土器は、第６層及びその上の洪水堆積層から出土したものである。

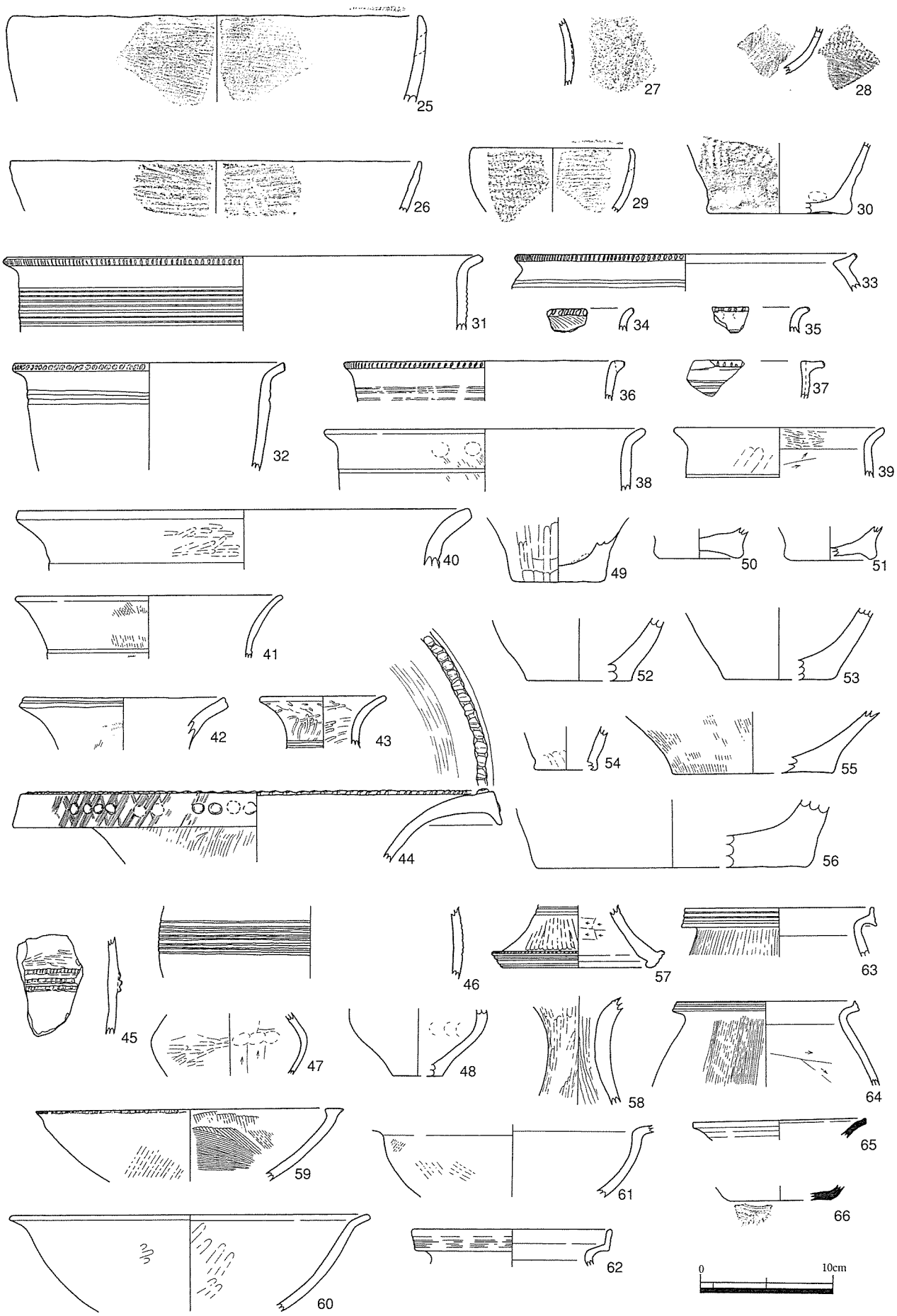
壺形土器　No.40～No.43は口縁部が緩やかに外反する前期の壺形土器で、No.41・No.43は口縁部下方に沈線を施し、No.42は口縁端部に沈線を施す。No.44は中期の壺形土器でラッパ状に大きく外反する口縁を呈し、口縁端部は下方に肥厚させ、斜め格子文様を施したうえにボタン状の突帯を施す。No.47・No.48は小型の壺形土器である。

甕形土器　No.31～No.39は口縁端部を外方にL字あるいは僅かに屈曲させた前期の甕形土器で、No.31～No.37は口縁短部に刻み目を施し、No.34・No.35以外はいずれも口縁部下方に数条の沈線を施す。No.62～No.64は後期の甕形土器で、口縁端部を上部あるいは上下に肥厚し数条の凹線を施す。

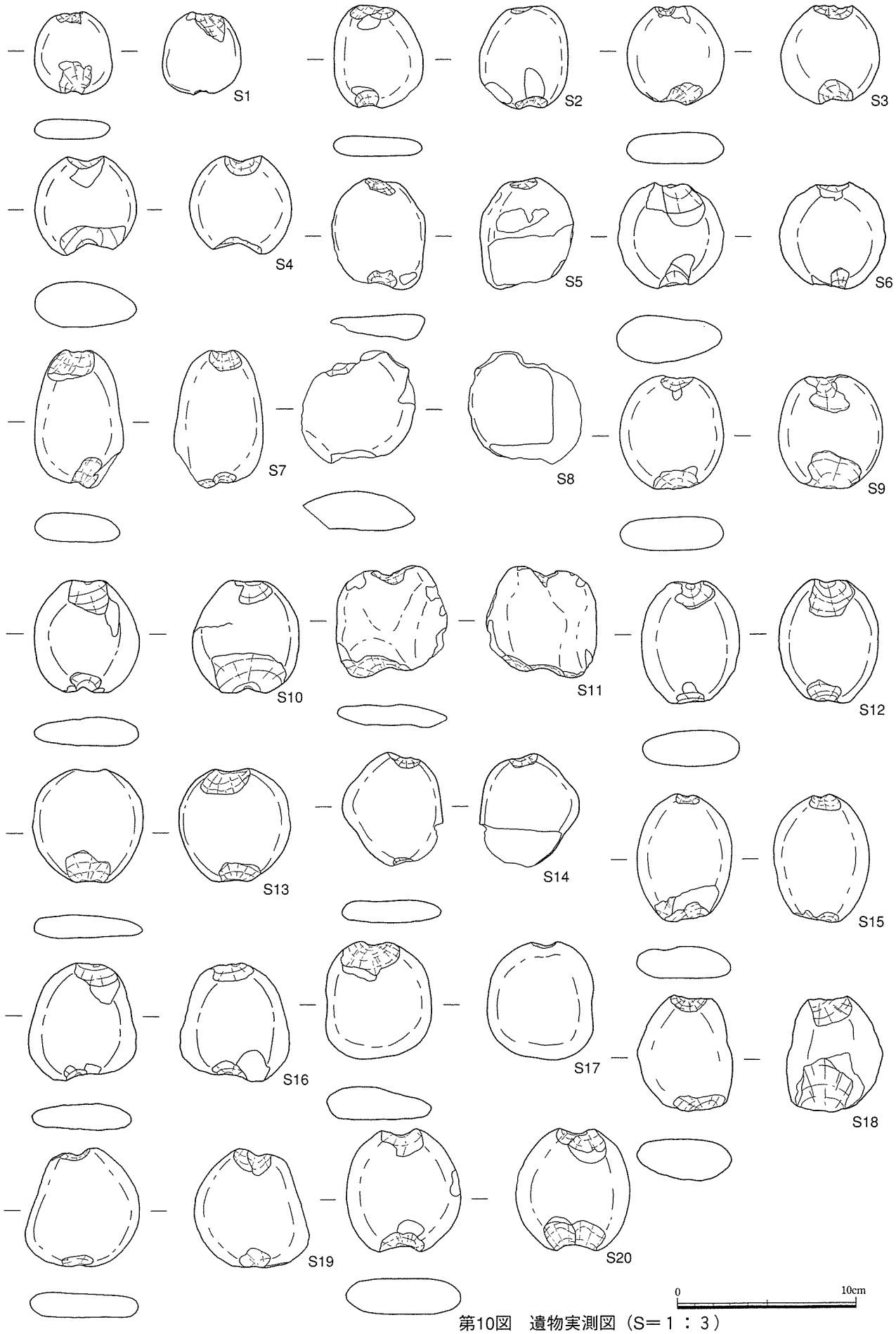
高坏形土器　No.57～No.61は中期の高坏で、No.57は底部で端部を上下に肥厚させ沈線を施す。No.59～No.61は坏部で、No.59口縁端部を肥厚させ端部外面に刻み目を施す。No.60・No.61は口縁端部を緩やかに外反させる。



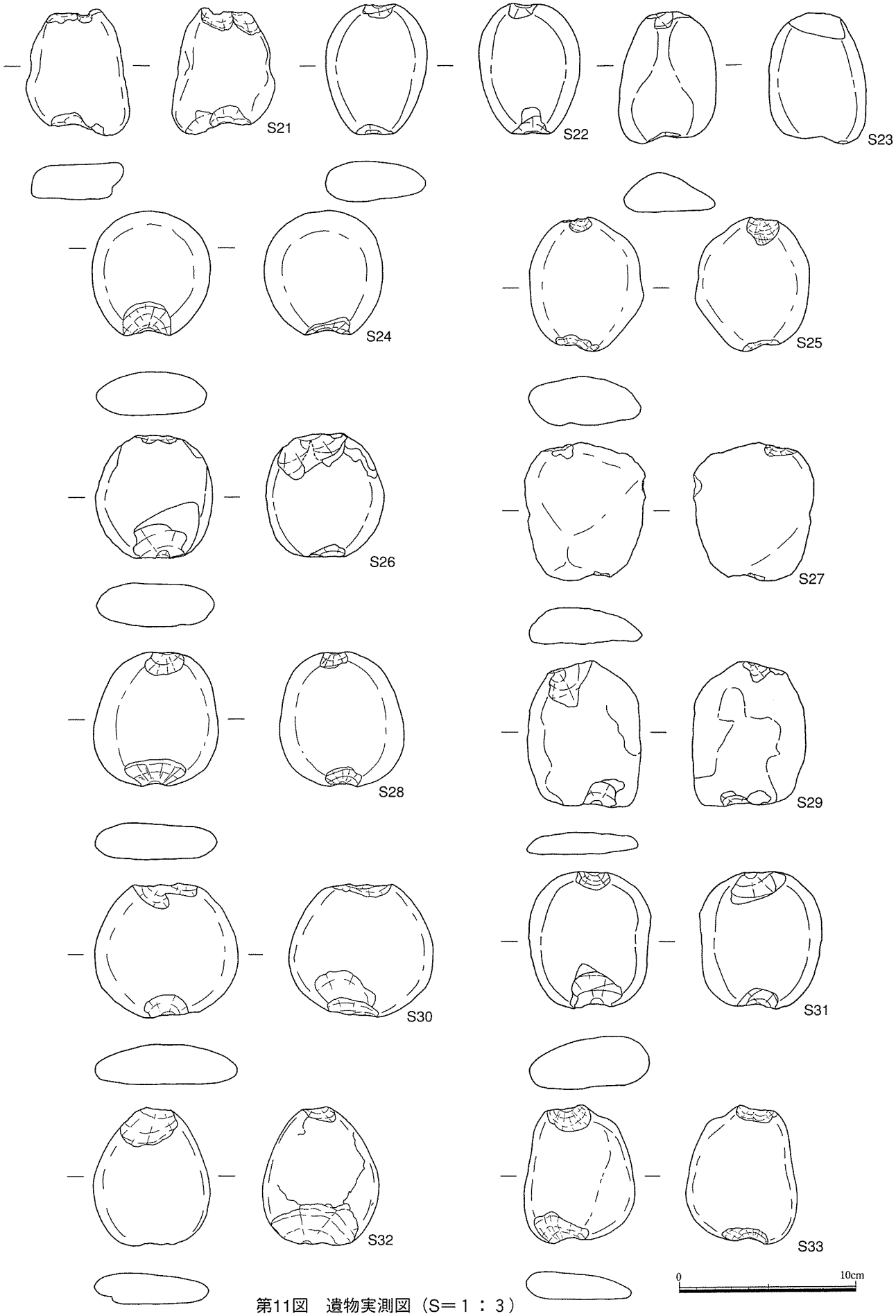
第８図　遺物実測図（S＝１：４）



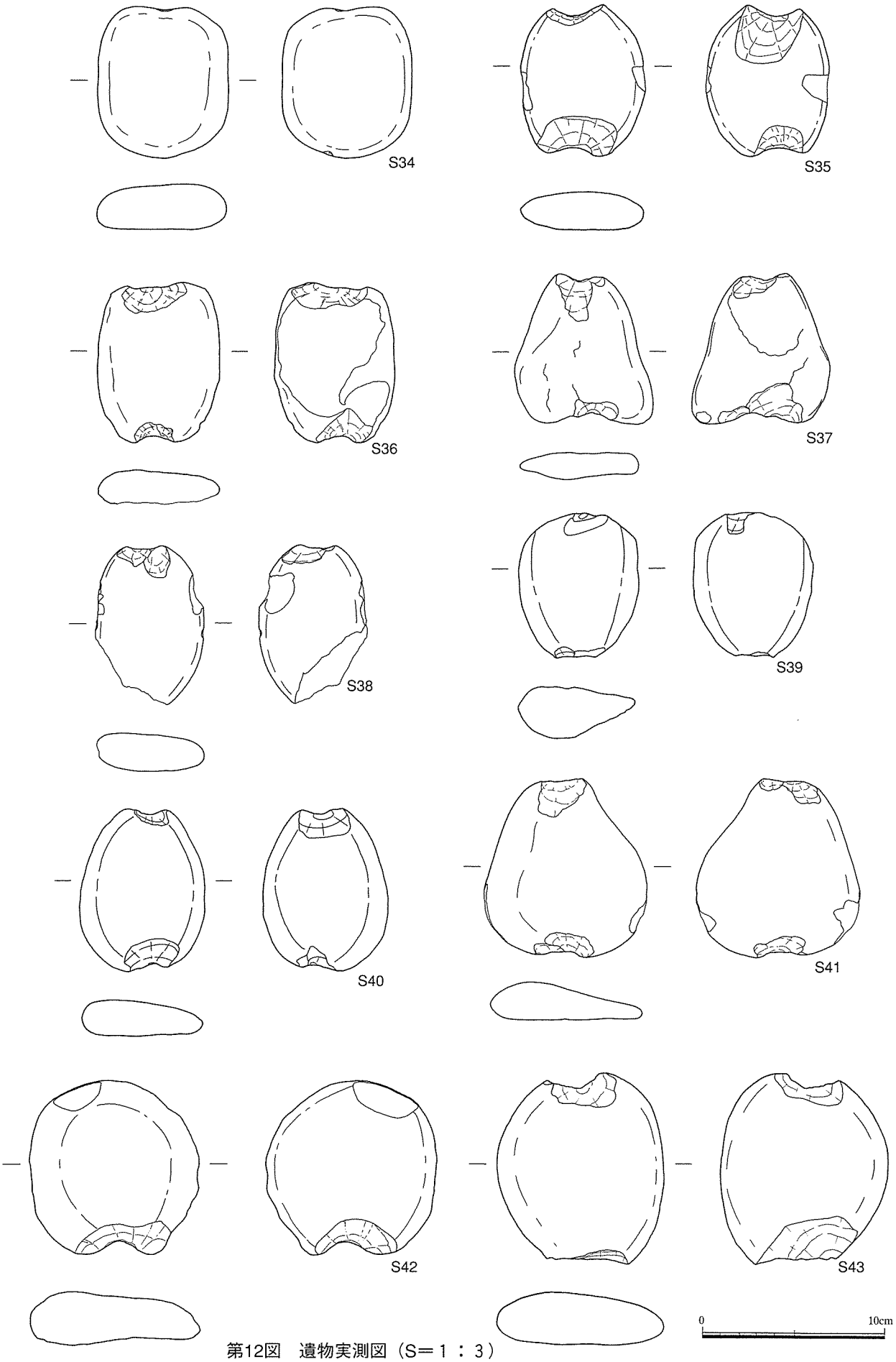
第９図　遺物実測図（S＝１：４）



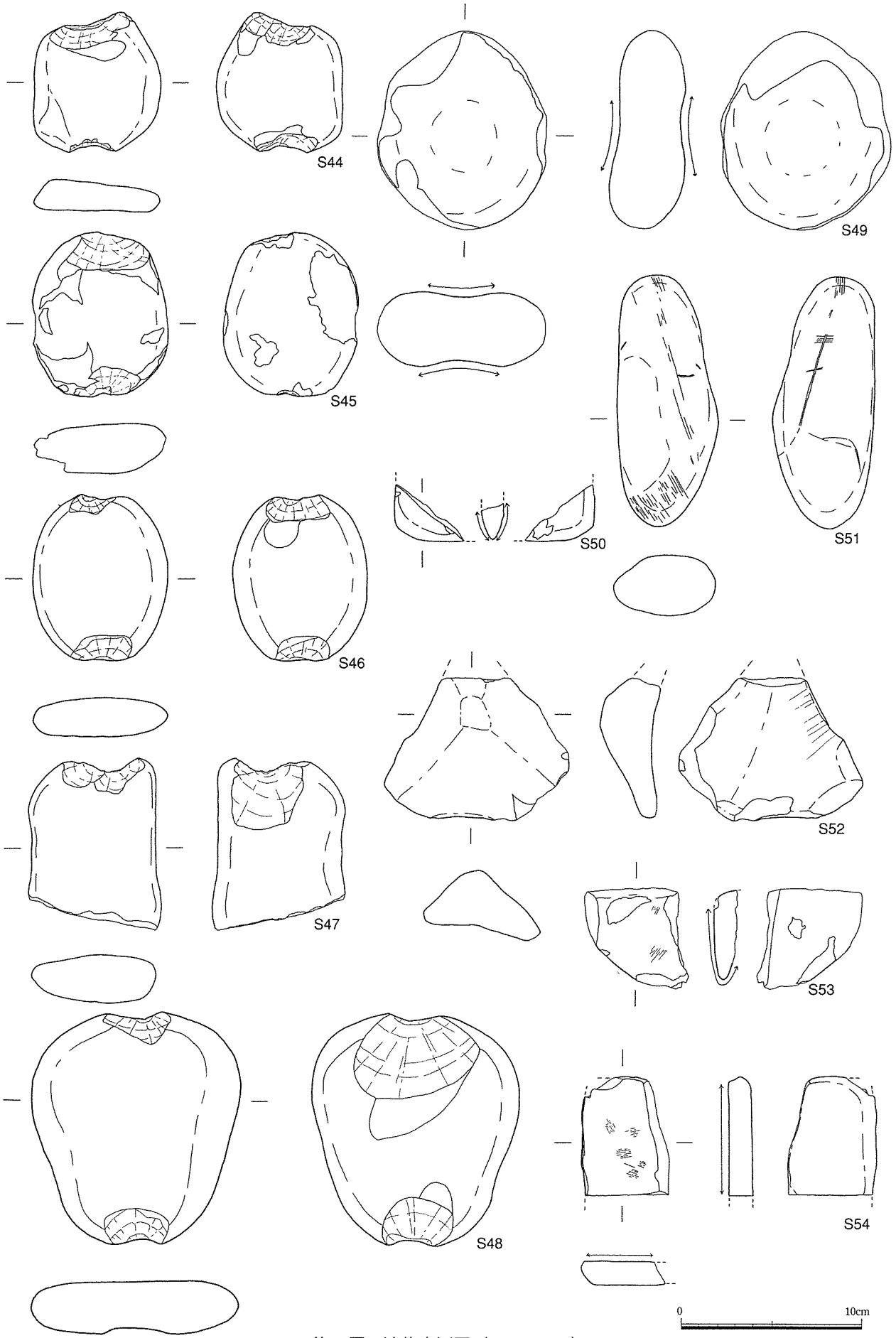
第10図　遺物実測図（S＝１：３）



第11図　遺物実測図（S＝１：３）



第12図　遺物実測図（S＝１：３）



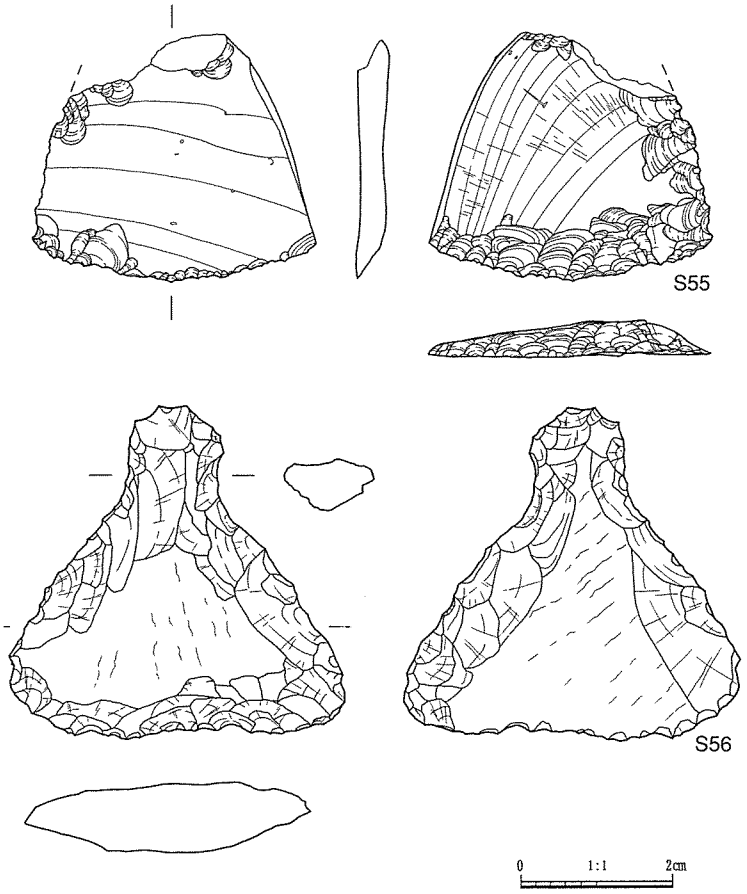
第13図　遺物実測図（S＝１：３）

古墳時代以降の遺物（第９図）

須　恵　器　No.65は緩やかに外反する小型壷の口縁部、No.66は坏の底部で回転糸切り痕が残る。

その他の遺物（第10図～第14図）

石　製　品　Ｓ１～Ｓ48は石錘で、円礫の対角刷る２点を打ち欠き、縄かけ部分を作るタイプのものであるが、No.17・No.24・No.34のように片側のみ打ち欠いたものも見られる。形状はほとんどが長楕円形であるが、三角形のものも見られる。Ｓ49は敲き石、Ｓ50は磨製の石斧、Ｓ51は摺り石、Ｓ53は石包丁、Ｓ54は砥石である。Ｓ52は岩偶の一部と考えられる。Ｓ55は黒曜石製のスクレイパー、Ｓ56はサヌカイト製の石匙である。



第14図　遺物実測図（S＝１：１）

第４章　まとめ

今回の調査は、大掛かりな調査が行われた昭和57年（1982年）の調査地の隣接地であったが、大変狭い範囲での調査であったため、そのほとんどが遺物の取り上げのみの調査となってしまい、遺構の確認はほとんどできなかった。しかしながら、調査面積からすると比較的多くの遺物を検出することができた。

今年度は、本報告書に記載した14次調査、15次調査として12次調査の西南隣接地及び行者山の西側にあたる大谷遺跡の調査も行われた。大谷遺跡では弥生時代の水田及び大規模な水路が検出されており、目久美遺跡と繋がっていると思われる。今後15次調査の西側隣接地の調査も予定されており、目久美遺跡と大谷遺跡の繋がりも解明されるであろう。目久美遺跡の更なる広がりが解明されることを期待したい。

遺物観察表（土器）

遺物番号	挿図番号	器種	種類	法量（cm）				焼成	色調	胎土	調整	備考
				口径	残存高	底径	最大径					
1	8	鉢	縄文	32.8	9.8			良好	暗褐色	密 1 mm前後の白砂粒	内）ナデ 外）隆帯・刺突文	
2	8	鉢	縄文	25.6	7.6			良好	褐色	密	内）ナデ 外）貝殻刺突文・貝殻条痕	
3	8	鉢	縄文	31.2	6.1			良好	黒褐色	密1.5mm前後の白砂粒	内）貝殻条痕 外）刺突文	
4	8	鉢	縄文		9.8		24.3	良好	褐色	密	内外面共に貝殻条痕	外面煤付着
5	8	鉢	縄文	28.2	10.5			良	暗灰褐色 内面一部暗褐色	密	内）ナデ 外）貝殻刺突文・縄文	
6	8	鉢	縄文	28.0	4.2			良好	暗褐色	密	内外面共に貝殻条痕	
7	8	鉢	縄文		4.9			良好	内）橙褐色 外）褐色	密微砂粒少量含む	内）ナデ 外）ナデ・爪形刺突文	口縁部沈線
8	8	鉢	縄文		8.2			良好	褐色	密	内）ナデ 外）逆Ｃ形文・爪形文	外面煤付着
9	8	鉢	縄文		5.5			良好	内）暗褐色 外）黒褐色	密2mmの少量砂粒含む	内）ナデ 外）ナデ・刺突文	口縁端部刻み
10	8	鉢	縄文		6.9			良好	暗褐色	密	内）貝殻条痕 外）調整不明	外面煤付着
11	8	鉢	縄文	22.4	6.0			良好	暗褐色	密細砂粒含む	内外面共に貝殻条痕	口縁端部刻み
12	8	鉢	縄文		3.1			良好	暗褐色	密細砂粒	内）貝殻条痕 外）貝殻条痕後ナデ	外面煤付着
13	8	鉢	縄文	23.8	6.1			良好	暗褐色	密	内）ナデ 外）爪形文	
14	8	鉢	縄文			6.0		良好	褐色	密	内外面共に貝殻条痕	
15	8	鉢	縄文	37.2	10.8			良	内）暗褐色 外）暗灰褐色	密	内外面共に貝殻条痕	
16	8	鉢	縄文		9.7			良好	褐色	密	内外面共に貝殻条痕	外面煤付着
17	8	鉢	縄文		4.0			良好	茶褐色	密	内）ナデ 外）貝殻条痕	
18	8	鉢	縄文	24.0	4.7			良	黒褐色	密	内）ナデ 外）貝殻条痕文	口縁端部刻み
19	8	鉢	縄文	24.0	3.1			良	黒褐色	密	内）ナデ 外）貝殻押型文	
20	8	鉢	縄文	24.5	3.9			良好	内）暗褐色 外）淡茶褐色	密1mm前後の白砂粒	内外面共に貝殻条痕	
21	8	鉢	縄文	28.5	3.1			良好	茶褐色	密	内外面共にナデ	口縁端部刻み
22	8	鉢	縄文	26.6	8.5			良好	暗褐色	密	内）ケズリ後ナデ 外）貝殻条痕	外面煤付着
23	8	鉢	縄文	29.6	5.4			良好	暗褐色	密	内）貝殻条痕 外）調整不明	外面煤付着
24	8	鉢	縄文	25.6	3.5			良好	暗褐色	密	内外面共に貝殻条痕	外面煤付着
25	9	鉢	縄文	30.4	1.4			良	内）褐色 外）黒色	密	内外面共に貝殻条痕	口縁端部刻み・外面煤付着
26	9	鉢	縄文	30.6	3.8			良好	褐色	密	内外面共に貝殻条痕	
27	9	鉢	縄文		5.0			良好	黒褐色	密0.5mm～2.5mmの砂粒含む	内）貝殻条痕 外）貼付け	
28	9	鉢	縄文	-	3.5			良好	暗黒色	密細砂粒	内）貝殻条痕 外）貝殻条痕・刺突文	
29	9	鉢	縄文	12.0	4.8			良	内）暗褐色 外）暗褐色・黒色	密	内）貝殻条痕 外）貝殻刺突文	口縁端部刻み
30	9	鉢	縄文		5.3	10.2		良	暗灰褐色	密1mmの少量砂粒含む	内）ナデ 外）縄文・ナデ	
31	9	甕	弥生	35.0	5.6			良好	内）灰褐色 外）橙褐色	密3mmの多く砂粒含む	内外面共にナデ	口縁端部刻み・凹線、外面8条凹線
32	9	甕	弥生	20.0	8.0			良	黒褐色	密砂粒多く含む	内外面共にナデ	口縁端部刻み、外面2条凹線
33	9	甕	弥生	25.1	2.8			良好	淡褐色	密1mm前後の白砂粒	内外面共にナデ	口縁端部刻み・沈線
34	9	甕	弥生		1.8			良好	淡褐色	密0.5mm～3mmの砂粒含む	内）ナデ 外）ハケ目	口縁端部刻み、煤付着
35	9	甕	弥生		1.9			良	淡灰色	密1mmの少量砂粒含む	内外面共にナデ	口縁端部刻み、外面１条凹線
36	9	甕	弥生	20.0	3.0			良好	淡褐色	密2mm前後の白砂粒	内外面共にナデ	口縁端部刻み、外面条沈線
37	9	甕	弥生		2.8			良	淡灰褐色	密1mm～2mmの少量砂粒含む	内外面共にナデ	口縁端部刻み、外面3条凹線
38	9	甕	弥生	23.4	4.7			良好	内）淡白灰褐色 外）淡灰褐色	密0.5mm～2.5mmの砂粒含む	内）ナデ 外）ナデ・ハケ目	外面沈線
39	9	甕	弥生	15.4	3.8			良好	内）黒褐色 外）褐色	密4mmの多く砂粒含む	内）ケズリ・ミガキ 外）ナデ	口縁部黒斑付着
40	9	甕	弥生	33.6	4.5			良好	褐色	密1mmの多く砂粒含む	内）ナデ 外）ミガキ	外面黒斑付着
41	9	壺	弥生	19.4	4.7			良好	淡灰褐色	密0.3mm～2mmの少量砂粒含む	内）ナデ 外）ナデ・ハケ目	外面沈線
42	9	壺	弥生	14.9	3.9			良好	淡褐色	密0.5mm～2mmの砂粒含む	内）ナデ 外）ナデ・ハケ目	
43	9	壺	弥生	9.1	3.9			良好	淡褐色	密1.5mm前後の白砂粒mm前後の白砂粒	内）ナデ 外）磨き	外面沈線
44	9	壺	弥生	35.0	5.3			良好	淡褐色	密	内外面共にナデ・ハケ目	口縁端部浮文・斜格子文・貼付突帯
45	9	壺	弥生		7.7			良好	灰褐色	密3mmの多く砂粒含む	内）ナデ 外）ナデ・ミガキ	外面3条の刻み入り突帯
46	9	甕	弥生		5.4			良	淡灰褐色	密	内外面共にナデ	外面8条凹線
47	9	壺	弥生		4.7		11.7	良好	灰褐色	密2mmの少量砂粒含む	内）ケズリ 外）ミガキ	外面煤付着
48	9	小壺	弥生		5.0	3.6		良	淡灰褐色	密0.5mm以下の少量砂粒含む	内外面共にナデ	
49	9	甕	弥生		4.8	6.0		良好	淡黄褐色	密0.5mm～3.5mmの砂粒含む	内）ナデ 外）ミガキ後ナデ	
50	9		弥生		2.3	5.9		良好	暗褐色	密	風化のため調整不明	
51	9		弥生		5.9	2.5		良好	暗褐色	密1mmの多く砂粒含む	風化のため調整不明	

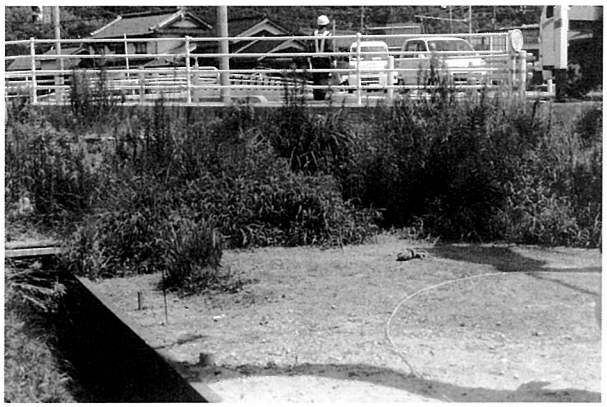
遺物番号	挿図番号	器種	種類	法量（cm）				焼成	色調	胎土	調整	備考
				口径	残存高	底径	最大径					
52	9	壺	弥生		4.7	7.8		良	淡黄褐色	密1mm～2mmの少量砂粒含む	内）風化のため調整不明 外）ナデ	
53	9	壺	弥生		5.4	8.0		良	淡灰褐色	密1mm以下の少量砂粒含む	内外面共にナデ	
54	9		弥生		3.3	4.4		良好	内）灰褐色 外）暗褐色	密3mmの多く砂粒含む	内）ナデ 外）風化のため調整不明	
55	9	甕	弥生		4.6	12.0		良	淡褐色	密	内）ナデ 外）ハケ目	
56	9	壺	弥生		5.0	20.2		良	内）淡灰褐色 外）淡黄褐色	密1mm～2mmの少量砂粒含む	風化のため調整不明	
57	9	高坏	弥生		4.7	11.0		良	淡褐色	密砂粒含む	内）ナデ・ケズリ 外）ミガキ	外面2条凹線・底端部3条凹線・刻み
58	9	高坏	弥生					良好	淡褐色	密0.5mmの多く砂粒含む	内）シボリ 外）ミガキ	
59	9	浅鉢	弥生	20.6	5.4			良好	淡灰褐色	密	内）ハケ目 外）ハケ後ナデ	外面煤付着
60	9	高坏	弥生	26.4	7.3			良好	淡灰褐色	密0.5mm～2mmの砂粒含む	内外面共に磨き 口縁部ナデ	
61	9	鉢	弥生		5.4			良	淡灰褐色	密	内）ナデ 外）ナデ・ミガキ・ハケ目	
62	9	甕	弥生	14.7	2.8			良好	内）暗褐色 外）淡褐色	密0.3mm～1mmの少量砂粒含む	内）ナデ・ケズリ 外）ナデ	口縁端部3条凹線
63	9	甕	弥生	14.0	3.7			良	淡灰褐色	密	内）ナデ・ケズリ 外）ハケ目・ナデ	口縁端部3条凹線
64	9	甕	弥生	13.2	6.4			良好	灰褐色	密	内）ナデ・ケズリ 外）ナデ・ハケ目	口縁部2条凹線
65	9	壺	須恵		1.5	12.9		堅緻	灰色	緻密	内外面共にナデ	
66	9	坏	須恵		1.2	7.5		堅緻	灰色	緻密	内外面共にナデ	底部回転糸切り

遺物観察表（石製品）

遺物番号	挿図番号	種別	法量（cm）				遺物番号	挿図番号	種別	法量（cm）			
			長径	短径	厚み	重量(g)				長径	短径	厚み	重量(g)
S 1	10	石錘	4.7	4.4	1.1	33.0	S 29	11	石錘	8.3	6.4	1.3	86.0
S 2	10	石錘	5.8	5.0	1.2	51.0	S 30	11	石錘	7.6	8.1	2.3	163.0
S 3	10	石錘	5.6	5.5	1.8	76.0	S 31	11	石錘	7.9	7.0	3.0	200.0
S 4	10	石錘	5.5	5.7	2.5	98.0	S 32	11	石錘	8.0	6.7	1.8	122.0
S 5	10	石錘	6.3	5.3	1.5	49.0	S 33	11	石錘	7.9	6.3	1.6	118.0
S 6	10	石錘	5.9	6.0	2.7	116.0	S 34	12	石錘	8.3	7.2	2.5	275.0
S 7	10	石錘	7.8	5.0	1.7	89.0	S 35	12	石錘	8.4	6.8	2.1	168.0
S 8	10	石錘	6.3	6.3	2.2	84.0	S 36	12	石錘	8.8	6.7	1.9	137.0
S 9	10	石錘	6.4	5.9	2.0	100.0	S 37	12	石錘	8.3	7.6	1.5	119.0
S 10	10	石錘	6.3	5.9	1.6	82.0	S 38	12	石錘	8.8	6.0	2.2	155.0
S 11	10	石錘	6.4	6.2	1.3	60.0	S 39	12	石錘	8.0	6.6	2.8	199.0
S 12	10	石錘	6.9	5.5	2.0	97.0	S 40	12	石錘	9.0	6.9	2.0	162.0
S 13	10	石錘	6.4	6.3	1.3	74.0	S 41	12	石錘	9.8	9.0	2.1	216.0
S 14	10	石錘	6.4	5.7	1.25	53.0	S 42	12	石錘	9.6	9.3	3.0	287.0
S 15	10	石錘	7.2	5.3	1.8	88.0	S 43	12	石錘	10.5	9.2	2.9	408.0
S 16	10	石錘	6.6	6.1	1.5	83.0	S 44	13	石錘	7.8	7.0	1.7	134.0
S 17	10	石錘	6.7	6.0	1.9	120.0	S 45	13	石錘	9.2	7.6	2.8	216.0
S 18	10	石錘	6.6	5.4	2.4	89.0	S 46	13	石錘	9.3	7.5	2.2	208.0
S 19	10	石錘	6.8	6.5	1.4	90.0	S 47	13	石錘	9.6	7.4	2.7	256.0
S 20	10	石錘	6.9	6.4	2.0	125.0	S 48	13	石錘	12.9	11.5	3.0	655.0
S 21	11	石錘	7.3	5.9	2.1	107.0	S 49	13	敲き石	11.1	9.3	4.2	581.0
S 22	11	石錘	7.4	5.7	2.2	121.0	S 50	13	石斧	3.1	3.8	1.2	11.0
S 23	11	石錘	7.5	5.5	2.3	85.0	S 51	13	摺り石	14.0	5.6	3.4	380.0
S 24	11	石錘	7.1	6.75	2.5	174.0	S 52	13	岩偶	7.9	10.2	3.9	252.0
S 25	11	石錘	7.7	6.5	2.8	169.0	S 53	13	石包丁	5.6	5.9	1.3	64.0
S 26	11	石錘	7.0	6.7	2.5	137.0	S 54	13	砥石	6.7	5.0	1.35	72.0
S 27	11	石錘	7.9	6.8	2.1	126.0	S 55	14	スクレイパー	3.3	3.8	0.5	5.0
S 28	11	石錘	7.7	7.2	2.1	174.0	S 56	14	石匙	4.4	4.4	0.9	14.0

写　真　図　版

調査前状況（東側より）

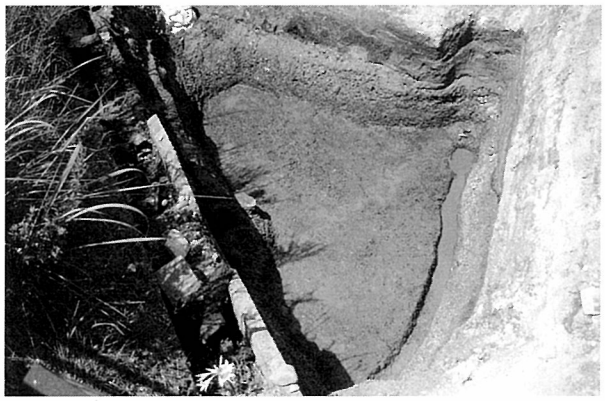


調査前状況（西側より）

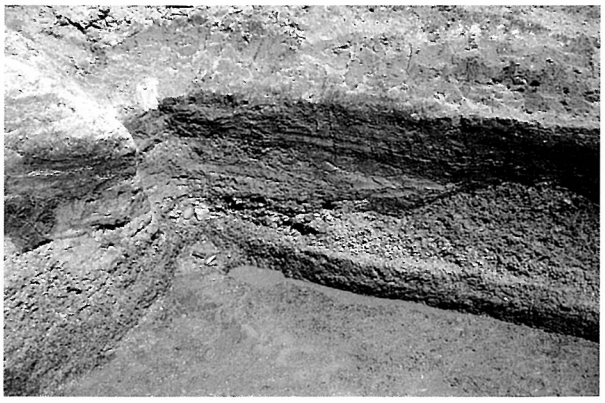
石列検出状況

足跡検出状況

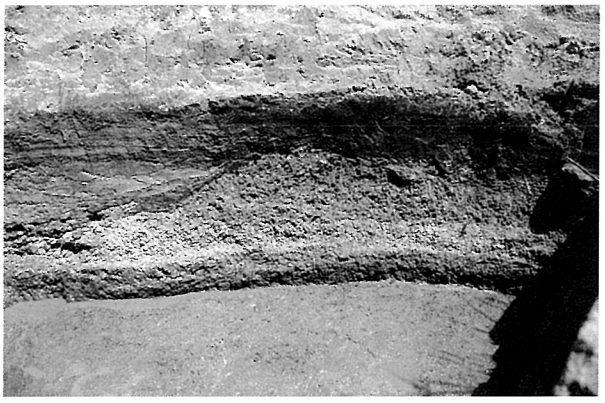
遺物出土状況



完掘状況

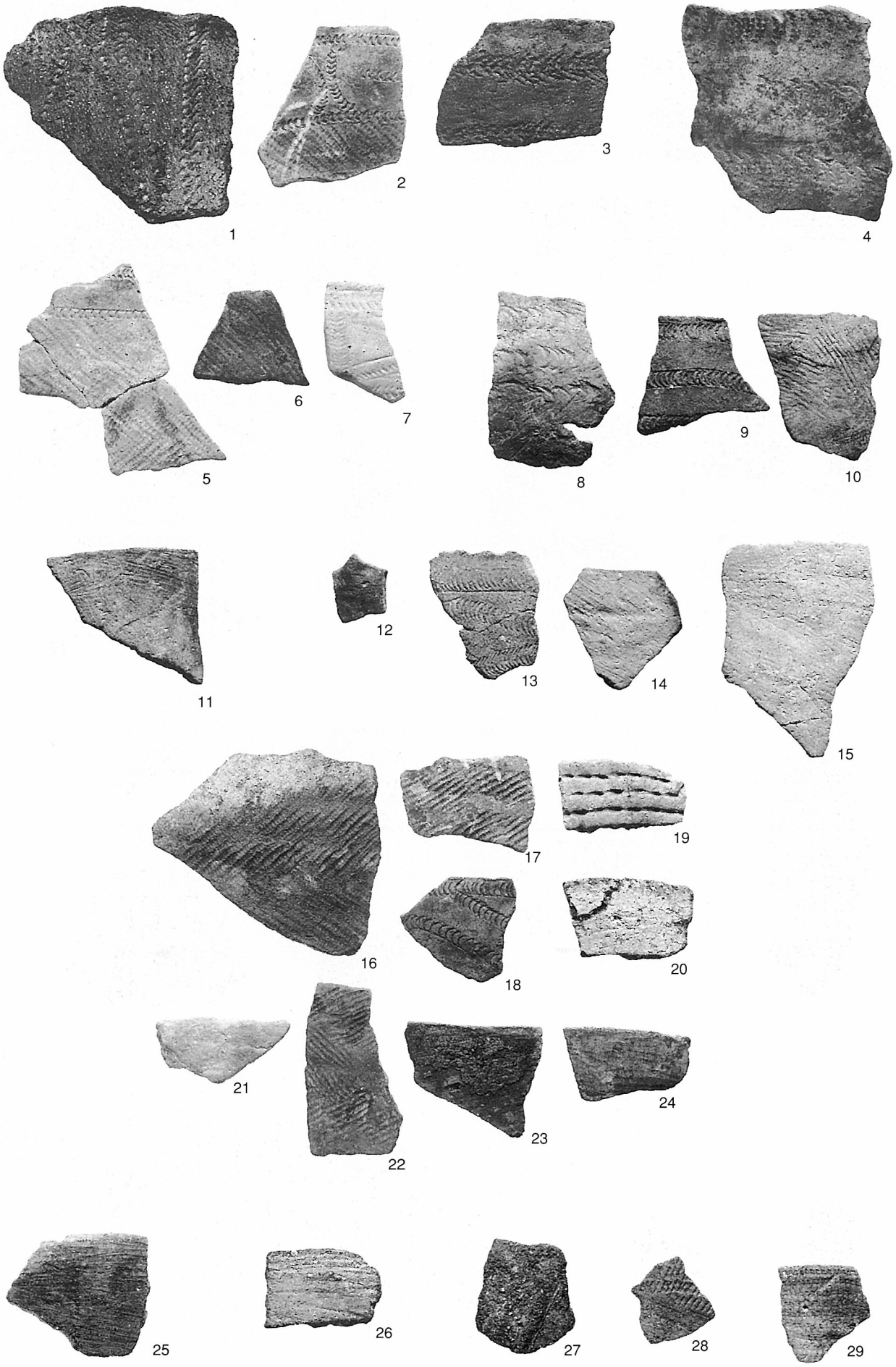


土層断面



土層断面

写真図版 2



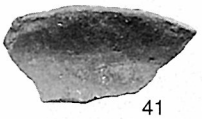
31

32

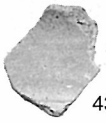
33

34 35

40

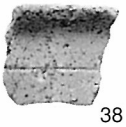

41

42


43

36

37


38

39

44

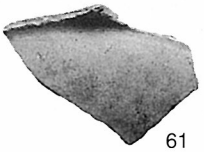
45

46

47

48

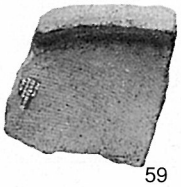
60


61

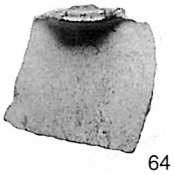
62

54

57


59

63


64

65

66

S51

S49

S54

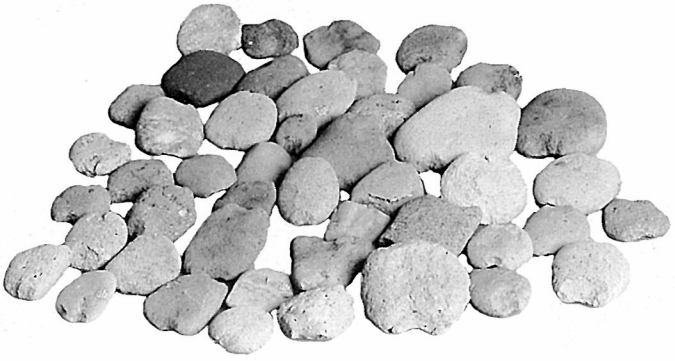
S50

S53

S52

S55

S56



報告書抄録

ふりがな	めぐみいせき（14じちょうさ）
書名	目久美遺跡（14次調査）
副書名	3·4·20車尾大谷町線地方道路交付金事業
巻次	
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	59
編著者名	平木裕子
編集機関	財団法人　米子市教育文化事業団　埋蔵文化財調査室
所在地	〒683－0033　鳥取県米子市長砂町935番地1　TEL・FAX 0859-22-7209 eメールアドレス　maibun@sanmedia.or.jp
発行年月日	西暦　2008年　3月31日　平成　20年　3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
目久美遺跡 （14次調査）	鳥取県米子市 目久美町	31202		35度 25分 00秒	133度 20分 35秒	平成18年 8月6日 ～ 平成18年 8月10日	35㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
目久美遺跡 （14次調査）	散布地	縄文時代	石列 足跡	縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、石製	

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書

目久美遺跡

２００８年3月

編集・発行　財団法人　米子市教育文化事業団

〒６８３－００３３　鳥取県米子市長砂町９３５－１

ＴＥＬ　０８５９－２２－７２０９

印　　刷　(有)米子プリント社